

全林研会長賞

千葉県

千葉県林業研究会 ^{ちようせい} 長生支部

所在地 > 千葉県長生郡長南町

設立 > 昭和40年3月

会員 > 男12人

年齢 > 36歳～70歳 平均57.5歳

主なプロジェクト

- ◆ 小学生を対象とした、シイタケ種駒打ち体験会
- ◆ 高校生に対する林業体験指導
- ◆ 県林研が実施する共同作業への参加

1. 地域の概況

私たちの住む長生地域は、茂原市ならびに長生郡一宮町・睦沢町・長生村・白子町・長柄町・長南町の1市5町1村からなり、千葉県のほぼ中央に位置し、北は山武郡市、南は夷隅郡市、西は千葉市・市原市に接し、東は太平洋の荒波打ち寄せる九十九里海岸となっています。

地勢は、海岸に沿った東部の平坦な沖積平野と、西部の房総台地の裾部からなり、河川が台地深く入り込んで複雑な谷津を形成しています。

農林業関係については、稲作を中心に海岸地帯のトマト・メロン・サラダ菜等の園芸作物をはじめ、中山間地帯の酪農、シイタケ等温暖な気候や豊かな自然に恵まれ、首都圏の食糧供給地域としての役割を果たしています。

当地域には9,211haの森林が存在しており、そのうち人工林は2,471haで、人工林率26.8%となっています。

長期にわたる木材価格の低迷等により、適切な森林整備が図られておらず、木材生産も低迷しています。

2. グループの結成の動機

昭和40年前後の高度経済成長で、農山村の青年は、地元で就労することな

く、近郊の町へ都会へと流出が続いていました。このような中、千葉県が林業後継者を対象に実施した「山村中堅青年林業教室」に参加修了した人たちによって、林業を志す仲間同士が、自由に意見交換や、親睦を深められる“場”をつくろうと「仲間の、仲間による、仲間のためのグループ」を会活動の基本原則として「千葉県林業研究同志会」、現在の千葉県林業研究会が昭和40年3月に結成発足しました。

長生支部は2名の会員でスタートし、増減を繰り返しながら昭和58年には35名に増員され、視察、研究調査等を実施し、保育作業を受け負うなど活動したのですが、当時から続く材価の低迷は回復の兆しもなく、10名になった時期もありました。

近年、後継者や森林組合職員の若手の加入もあり、メンバーが若返り13名となりました。ところが前副支部長が、本年6月に急逝され、現在は12名で活動しています。

3. グループの活動状況

当支部は、組織的に林業に関する知識・技術を学び、地域における林業経営の改善を図り農山村の近代化に貢献し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的に活動してきましたが、次の世代を育てていく時期にさしかかっています。

長生地域は山間部と平野部からなっており、昔から米作中心でこれにプラスアルファの型が多く、このような地域の特性から当支部会員の山林は備蓄林的な位置づけとなっていることが多いです。

所有山林の比較的多い人、少ない人といろいろで、また、水稻、特用林産物、山行苗木生産、会社員等やその組み合わせなど、会員の経営状況はさまざまで、関心もさまざまです。

しかし、お互いの親睦を図り、会をスムーズに進めようということから、支部の活動にはテーマに関わらず、出席してもらうようにして、役員も回り番制として会を成立させるようにしています。

当支部では、松くい虫の被害木の伐採、枝打ち材製品の研究、他支部との

技術交換会、シイタケ原木林の保育管理、枝打ち技能競技会、シイタケ栽培技術研修会と、その時代に合わせてテーマを変えて取り組んでいます。

長期に取り組んでいる課題については、昭和53年に県の林業試験場から導入したスギの品種17種類を植え、「林研の山」として設定し、品種別の土壌や環境による生育の差異について、昭和54年、昭和61年、平成12年の3回調査を行いました。

平成12年の結果は、グループコンクールで発表させていただきました。今後も継続的に調査する予定です。

最近の支部の主な活動は、会員が生産する原木シイタケや山行苗木のイベント等でのPRや小学生を対象とした、原木シイタケ種駒打ち体験会の開催、小学生や高校生に対する林業体験指導、県林研が実施する共同作業への参加やスギ花粉調査です。

原木シイタケ種駒打ち体験会は、林野庁の児童・生徒の林業就業促進支援事業を活用し、児童・生徒が森林の働きやきのこに対し理解を深めるため、原木シイタケ栽培における種駒打ち体験会を開催するものです。

その計画内容は、

主催は千葉県林業研究会。森林や林業の話 きのこ栽培方法の話 原木へのきのこの菌の植え付け体験を2時間で行う。対象者は、地域内の小学校4～5年生。種駒打ち体験は、原木50本で計画、学校には、経費の負担なし。ホダ木は、学校敷地内で管理する。ホダ木と発生するシイタケは学校の所有。実施時期は、1月中旬～2月上旬。としました。

実施にあたって、会員の一人が、茂原市東郷小学校のPTA会長をしていた縁で、同小の2年生がシイタケ生産現場を毎年見学しているため、希望があるか確認したところ、快諾していただき平成23年2月1日に実施することになりました。

作業内容は、児童1人で1本の原木に穴あけ、駒打ちをする。ドリルは3本使用し、それぞれに大人が1人以上つくこととし、前支部長が、シイタケ栽培方法全般と当日の作業の手順説明を担当し、出席会員全員で作業の指導をすることになりました。

原木は105本に変更、種駒は3,000駒、電動ドリルとドリルのキリは5本ずつ、また仮伏せ用のダイオシートも準備し、学校には電動ドリルを動かすための電源と延長コード、作業をするときに敷くブルーシート、種駒を打ち込むカナヅチ20～50個を準備してもらおうこととしました。

当日は、気持ちのいい晴天でした。4年生98名が参加し賑やかに作業を行いました。

子どもたちは、みんな興味を持って楽しく活動し、そして熱心に聞き、事前に学習し、質問してくれたので、私たちも「やって良かったな」と実感しました。

また、学校側も、校長先生をはじめ先生方全員が大変喜んでくださいました。

事業は、平成22年度の種駒打ち体験会のみでしたが、平成23年には、長生支部として継続的にボランティアで本伏せの仕方についても指導しました。

平成24年度の課題としては、ホダ木が原発の事故後の降雨を浴びてしまったため、念のためホダ木と今後発生するシイタケの放射性物質検査をしなければならぬと考えています。

4. 今後の目標

東京電力福島第一原発の事故により漏れ出した放射性物質による影響で、当支部会員の大部分を占める原木シイタケ生産者も大きな影響を受けています。

今までの原木の主な供給先からの供給の見通しが見つからない中、県内や他県で原木を調達しなければなりません。

今こそ林研活動の中で培ってきた、森林を観る力、特にシイタケ原木林の保育管理の知識や伐採の技術を活かすときです。

一方、我が国の木材は、並材単価が安価な国際流通価格で決定してしまうことから、人工林の77%を占める民有林の整備を確保するため、生産規模の拡大によるコスト低減の政策だけでなく、顔のみえる地域の木材利用の循環に対しても、もっと目を向けていただければと思います。

森林は生物にとって欠くことのできない清らかな水や空気の供給源であり、二酸化炭素の吸収源であり、災害から守ってくれる場であり、人々の休

養や林産物の生産の場でもあります。

シイタケ栽培においても、森林は原木の供給源であり、ホダ場を提供してくれる場です。

このような森林の多面的機能発揮のため「仲間の、仲間による、仲間のためのグループ」という初心に立ち返り、この難局に対して、みんなで協力しながら立ち向かっていきたいと思います。